

世界おもしろ文化比較

——丸い地球のいたずらと楽しみ——

旅行作家（日本ペンクラブ会員）

清水 武

自己紹介

なにごとにも前向きにとらえよう

東京オリンピック・ボランティア報告

メディア担当から選手村へ



国際電話の時差からくるギャップ

東京オリンピックで、世界各国からの取材班が本国との電話交信の際に経験したかもしれない、ちょっとした困惑——



“エッ 日本は地球の裏側” だって？



「ブラジルは日本の裏側なんかじゃない！」と反発するブラジル人の言い分に理がありそうです。昔、天気予報で使われていた「裏日本側」「表日本側」という表現が変わったように・・・

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

「赤道」の正しい定義は次の4つのどれでしょうか？

「五つの『あ』の原則」とは？

あせらず、あわてず、あくせくせず、・・・・・・・・

世界で語られている日本人についてのジョーク

船が難破して無人島に タイタニックのエピソード



定年留学、世界文学紀行でのエピソードから

定年後、スペインのマラガ大学に1年間留学。続いて『ドン・キホーテ』を皮切りに15の世界文学作品の舞台を訪ねた際の異文化体験です。

担当教師をファーストネームで呼ぶ

「タケシ」「ラファエル」「ローサ」・・・

「ああ、ハグできなかったマドモアゼル！」



時差にまつわるもう一つの、こちらは楽しいエピソード。「レ・ミゼラブル」の舞台フランスを訪れた時のこと——パリジェンヌとの美しくも哀しい出会いの夢物語。



寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

自身のホームページに掲載されている英語とスペイン語の記事の翻訳チェックにまつわる裏話。

“Seniors, be ambitious!”

身体は老いても心まで枯れてはいけない！熟年よ大志を抱け！



ホームページ <http://donky.la.cocan.jp/>

自己紹介

皆さまこんにちは。ただいまご紹介いただきました清水武でございます。東京三多摩の青梅線の昭島市からやってまいりました。山に囲まれた三多摩から広々とした海の広がる横浜市最南端の金沢区にお邪魔して心まで広々としてくるような気持ちです。お呼びいただきましたましてありがとうございます。

「生涯現役かなざわ会」——なんと前向きな素晴らしい目標を持った会でありましょうか。人は誰でも生涯現役でありたいもの。私自身も定年後にそんな人生を目指してまいりました。そして今も！ こちらの会報の前号ですすでにプロフィールを紹介いただいておりますが、簡単に自己紹介させていただきますと、生まれは長野県、信州伊那の勘太郎の演歌の舞台です。大学は早稲田でした。卒業すると国立にある NHK 学園高校（テレビとラジオを活用した全国に生徒がいる通信制高校）の教師をしておりましたが、その後、新聞社の海外特派員としてパナマに約 10 年間駐在、北中南米と西ヨーロッパの国々を回ってまいりました。この間の訪問国は計 32 カ国になりました。

60 歳で定年になるとスペインのマラガ大学に 1 年間留学しました。中南米はブラジルを除きほぼ全ての国がスペイン語です。スペイン語はほぼゼロからの出発で 35 歳で赴任しましたが、長い駐在期間もあって現地ですたき上げのスペイン語を身につけてきました。そのスペイン語を学問的にもキチンと系統立てて学んでおきたいと、スペイン語の本国・スペインのマラガ大学に留学したのです。とても充実した 1 年間だったので後に続く定年退職者の参考になればと、その記録を「定年留学してみませんか？——60 歳からのアクティブライフのすゝめ——」との本として出版しました。一方、スペインといえばセルバンテスの作品「ドン・キホーテ」の舞台です。そこでその舞台ラ・マンチャを訪ね紀行文を書いたところ、郷里の信濃毎日新聞が 5 回の連載をしてくれたので気をよくした私は、それがきっかけとなり世界文学紀行というおおそれた夢を掲げて作品の舞台を訪ね歩いてきた次第です。

シェイクスピア、セルバンテス、ユゴー、トルストイ、ドストエフスキー、ミッチェル、モンゴメリーなど、これまでに日本でよく知られている 15 の作品の舞台を取材してきました。訪れた国の数では 11 カ国になります。紀行文のいくつかは雑誌等にも掲載されましたが、お陰様でこれらの蓄積が土台となって現在、私は昭島市に新しくできた三多摩有数の総合図書館を会場にボランティアで「世界文学を学ぶ会」を主宰し、地域の皆さんにも楽しんでいただいております。現在の仕事は市が運営する「介護予防教室」のシニア向け英会話教室の講師を務めたり、地元の中学校の学習支援員をしています。現在 80 歳ですが、極論すれば、現役時代よりも充実しているかもしれない定年後の人生を送っているような気がしております。

はげあたま

さて、こちらにお邪魔して、会場に私と同じような仲間がいることを拝見して親しみを感じております。この頭です。先日、こんなことがありました。

私は年金生活に入ってからできるだけ節約生活を心がけるようにしています。散髪代もその一つ。床屋さんに行くのをやめ、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。

とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなときには、やっぱり床屋さんに行くんですね。

でも、この頭です。〈頭を下げて指でさす〉他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

「マスター、ほらご覧のように、私の頭はほかの人の髪の毛の量の半分以下ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし……。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」。

と、その主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけですよ。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」

敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。あの中高年のアイドル、綾小路きみまろさんだったらこう言うでしょう。

「中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。あれから60年——。昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ……」

ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、でも頭の輝きのように第二の人生も輝かせていきたい、というのが今日の私の話しのもう一つのテーマでもあります。

国際電話の時差からくるギャップ

この夏、私は東京オリンピックでボランティアに参加しました。コロナ禍で開催そのものにも賛否両論さまざまな意見があり難しい局面もありました。大会ボランティアの自分も申込しこんだ時には「広報・メディア」部門に登録されていたのですが、途中で晴海の選手村に配属となったのです。でも結果的に海外選手との交流がある程度できたのはラッキーでした。

一方で、本来の「広報・メディア」部門だったら、きっと経験したであろう時差の問題について現場に身を置き体験することはできませんでした。そこで、ここでは私の中南米特派員としての駐在体験の中からのエピソードをご紹介します。

ブラジルですべての取材が終わり原稿をまとめ本社に電話するのは夜の10時頃。日本では朝の10時です。ブラジルは日本とちょうど12時間遅れの時差があります。

こちらはホテルのあまり明るくない部屋の灯りのもとで「コンバンワ」。ところが相手から戻ってくるあいさつは「オハヨウゴザイマス」。しかも、こちらは一日の仕事の疲れでブランデーなど寝酒の時間なのですが、相手は朝の空気を胸いっぱい呼吸、モ

ーニングコーヒーで張り切っているときなんですね。

この時差からくるギャップ！ 最初の挨拶言葉の戸惑いに直面したものです。今回のオリンピックで、東京から自分の国にニュースを送る世界各国の特派員も、きっと同じようなことを経験したであろうと推測しているところです。

ともあれ、皆さまも、海外旅行でその滞在地から日本に電話するときは、きっと私と同じような場面に遭遇することもあったのではないかと推測する次第です。

“エッ 日本は地球の裏側” だって？

そう、ブラジルといえば、こんなこともありました。位置はちょうど日本の真反対にあります。これをある時、ブラジル人と話をしていた「日本の真裏のブラジル」と言ってしまい、ずいぶん反撥されたことがありました。

「何言ってんだい。ブラジルから見れば日本こそ裏側じゃないか！」と。たしかにその通りですね。円い地球から見れば、どちらが表でどちらが裏かは決められないわけです。

ちなみに、南米で見る世界地図は日本のものとかかなり違っています。最も一般的な日本の地図・メルカトル図法では、日本が地図のほぼ真ん中にあり、その左側にアジア、ヨーロッパのユーラシア大陸とアフリカ大陸、右側に太平洋をはさんで北米大陸、南米大陸が描かれていますね。ブラジルなどは右下の端の方にある。

ところが、あちらの地図では、真ん中に北南米大陸が描かれています。ですから、日本の位置はというと、ずっと左上の端、日本の地図でいうイベリア半島の端、世界の外れのような位置になるのです。彼らの言うことも分かるような気がしますよね。

子供のころ聞いたラジオの天気予報では「表日本は晴れますが、裏日本は雪でしょう」と言っていました。皆さん、今は何と言っているかわかりますか？

そう、表日本ではなく太平洋側、裏日本ではなく日本海側ですね。やはりそこに住む人にとっては「裏」と呼ばれるのはあまり気持ちよくないわけです。なかには山陽地方と山陰地方についても、山陰を山光（山の光ですね）と呼んだらどうだろう、と提案する有識者もおりますよね。

「赤道」クイズ・・・地球をまたぐ

ここでクイズをしてみましよう。これは中学校の総合学習の授業の際に生徒によく聞いてみる質問です。人生経験の豊かな皆様にこんなことを聞くと失礼に当たるかもしれないが・・・

地球儀または世界地図に描かれている「赤道」の正しい定義は次の4つのどれでしょうか？

- ①「地球上に引かれている赤い線」
- ②「地球上の最も暑い点のつながり」
- ③「地球の横腹を一周し北半球と南半球に二分する線」
- ④「地心を通って自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円」

<2度読み上げ、各々を解説、正否を確かめていく>

3番、4番は一応、正しいといえるでしょう。でも2番は異論が出てきて、必ずしもそうではない、さらに1番ともなると論外ですよ。

エクアドルに行った時く実は国名の「エクアドル」とはスペイン語で「赤道」の意味なんです、私はその「赤道標・赤道記念碑」といわれる塔を訪れました。首都キト市から郊外へ車で小1時間。荒涼とした秃山のふもとのやや広い台地に、基台の各辺が約8m、高さ15mほどの、先端に向かってやや細くなっていく四角柱が立っていました。その上に直径3mほどの地球儀がのっかっています。〈レジュメの写真です〉

四角柱の各面には、それぞれ[E][O][S][N]との文字が刻まれています。それぞれスペイン語で「東」「西」「南」「北」の頭文字なんですね。

[E]（東）[O]（西）面にあたるコンクリートの地面の真ん中には、幅10cmほどの1本の線がはるか遠く東西に伸びていました。これこそまさに「地球を南北に二分する」という“赤道”なのです。

でも冗談ながら、色は何もついていませんでした。赤色でもなく、地面の汚れと土ぼこりでそれは黒色に近くなっていました。私は先に友人から聞いていたアドバイスを思い出し、その線を両足でまたぐと、持っていたカメラを同行の友人に渡し、ポーズをとったのです。友人は破顔一笑。「セニョール・シミズ！とうとう地球をまたぎましたネ」——と。この瞬間、私は地球の南北両半球に足をかけたことになるのだというんです。

たいそうなユーモアですが、言われてみるとついそんな気になってしまうから面白いですねえ。もちろん、またいだ両足も大事な股間も、熱さでヤケドをするようなことはありませんでした。

周囲の気温は暑さとは程遠く、摂氏10度前後で肌寒いほど。キトが海拔2800mの高地にあるからです。ここから西に1000キロ行くと、同じエクアドル領のガラパゴス諸島。ここは太平洋の赤道直下。ここも訪れる機会がありましたが1年中30度前後の熱帯です。

この赤道の下半分（この「下」という表現もあまりよくありませんね）、南半球では四季も反対になります。日本は今、冬に入ったところですが、南米のブラジルやアルゼンチンでは、これから夏なんですね。

「五つの『あ』の原則」

ところで、これだけ交通や通信の手段が発達しても、それぞれの国の人々の生き方や生活慣習はそんなに変わるものではありません。

新幹線が10分か15分おきに正確にピタリと発着する。都内の通勤電車も2～3分おきに入ってくる。少しでも遅れると皆イライラし出すという日本です。

それに比べ、私の駐在していたパナマではそうした問題はありませんでした。それは電車がなかったからです（もっとも運河鉄道があり最近ではパナマ市に地下鉄ができましたが）。小さな国なので近場へは自動車かバスで、国外へは飛行機が一般的でした。

分、秒を争う時間正確な日本の競争社会から、何事においてもゆったりしたリズムのラテン・アメリカ（中南米）に赴任したばかり、ずいぶんイライラしたものでした。

向こうは何事も「アスタ・マニャーナ」Hasta Mañanaでよいのです。これはスペイン語で「あしたまた」「あしたまで」という意味ですが、5時または6時になると、仕事が途中で、店にお客さんがいても「アスタ・マニャーナ」で帰ってしまう。仕事の約束の期限が守られなくても「アスタ・マニャーナ」。それよりも自分の生活を大切にしているんですね。

パナマでも、夜遅くまでオフィスに電気のついているのは、大部分が日系の駐在企業でした。もっとも、先ほど申し上げた時差の関係、ということもあり得ます。パナマと日本の時差は14時間。東京本社が昼間の時間に上司と連絡を取るためには、向こうは夜の時間に電話をしなければならないわけです。

ところがパナマ人は、社員のみならず役員も、官庁の局長クラスの幹部職員も、定時には殆ど帰ってしまっているのです。

私も、「これこれ、しかじかの取材をして〇日までに記事を送れ」との指示を東京本社から受け、一生懸命取り組むのですが、なにせ相手のあることです。はかどらない交渉と仕事にとらう「五つの『あ』の原則」を編み上げたのです。

<ボードへ転記>

「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」それでも決して「あきらめず」――。

この「五つの『あ』の原則」を心にとどめている限り、それほどイライラすることもなくなってきました。海外ではまさに **When in Rome, do as the Romans do!**

“ローマにいたらローマ人がするように振る舞う。つまり“郷に入ったら郷に従え”が大事なんですね。

「日本に行ったら日本人だらけだった！」

もう一つの大きな特徴は人種の混交です。

よく、ニューヨークは“人種の坩堝（るつぼ）”と言われてきましたが、首都のパナマシティも同じでした。ある時、日本での研修会に参加したパナマ人が帰国するなり言ってきました。

「S rシミズ (Mrシミズ)、日本での研修会は素晴らしかった。大勢の仲間にも会うことができ、あのシンカンセンにも乗ることができた。日本人は本当に親切で感激しました。充実した日本滞在だった。でも、とつても驚いたことが一つありました。それは、日本に行ったら日本人だらけですネ」と。

先住民のインディオ（インディアン）と、新大陸の発見以来、ヨーロッパからやってきた白人、それにパナマ運河の建設時に労働者として入った黒人や中国人。その子孫。そしてその混血。またその混血……。極端な言い方をすれば、100人集まれば、100人の肌の色が違うパナマからすれば、彼の発言もうなずけるような気がします。

もっとも、日本も近年は、いろんな国の人が東京にまた地方にも住むようになり、状況はかなり変わりつつありますが・・・・。

世界で語られている日本人についてのジョーク

海に囲まれた、世界の中でも特異な存在である日本と日本人についてこんな小咄も流布しています。

ここでまた質問です。

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。ほとんどが途中で溺れ、たった3人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことができた。若い男2人と女1人でした。さて、この男2人は女1人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか？」

答えは次の通りです。

フランス人：1人は彼女の夫に、もう1人は彼女の愛人になりました（フランスでは大統領でさえもこれに似た反対のケースはありましたね）。

イギリス人：なんと2人は、彼女を放っておいて、自分たち2人で愛し合い始めたのです。

イタリア人：2人は彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めました。

では日本人はどうしたのでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

——この小咄、日本人の行動形態の特徴をよく表わしていると思いますよね。

（携帯電話を世界中に持ち歩く現代ではちょっと状況が変わりますが、あくまでもよく知られたジョークとしての紹介です）

もう一つ、同じようなよく知られたタイタニックのジョークがあります。多分、この会場にも知っていらっしゃる方もいるかと思いますが・・・。

「いよいよ沈没しかけた船から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦人子供を優先させようとして船長が説得を試みま

す」
まずアメリカ人男性に：“Don’ t you want to be a hero?” 「キミはヒーローになりたくないか！」（解説）「勇者は沈みぬ」など。

イギリス人男性に：“You are an authentic gentleman. Aren’ t you?” 「あなたは模範的なジェントルマンだ！そうじゃないかい？」（〃）

ドイツ人男性には：“The law of your country states like this.” 「君の国の法律ではそうなっているよ」（〃）

イタリア人男性には：“If you jump into the ocean, all the ladies in this ship will applaud you.” 「君が海に飛び込めば船の女性全員が拍手するよ」

そして日本人男性には：なんと言ったのでしょうか？

“I think you had better behave as they do.” 「皆がそうするからあなたもそうした方がいいと思いますよ」

このように、日本人は、まず周りに合わせようとするんですね。周囲の目を気にし、突出することを恐れ、横並びを好み、他人のするように自分もする、という傾向を持つ

ている。日本人は、他人の目を気にしすぎるように思います。

高校時代からの夢を実現

ラテン・アメリカに10年間駐在、各国を訪ねて感じたこと、それは、これらの国の文化の原点はすべてスペインにある、ということでした（ブラジルのみポルトガル）。1492年、コロンブスが新大陸に到着して以来カトリックを軸にしたヨーロッパ文化が入っていったのです。

そこで、私はいつかはスペインに行き、スペイン語の勉強と共にその文学の原点ともいべき「ドン・キホーテ」を究めてみたい、との夢を抱いていました。

こうして2001年に定年となった翌年、その夢に挑戦、スペインの地中海岸コスタ・デル・ソル（太陽海岸）にあるマラガ大学に留学した次第です。もう一つは残り約20年の人生のための「自分への再投資」との意義も込めていました。

担当教師をファーストネームで呼ぶ

ここで、留学したマラガ大学で体験・見聞をしたエピソードのいくつかをご紹介しますと思います。

まず、クラスの仲間たちはすべてファーストネームで呼び合います。当時60代だった私も同じ扱いです。20代の若者に「タケシ！」と大きな声で呼ばれていました。私たち生徒も教師に対して「ラファエル」「ローサ」と呼び捨てです。英語圏の大学でも基本的には同じように思われます。これの方が「セニョール・シミズ、ミスター・シミズ」よりグッと親密感が湧くからです。

あるとき、クラスで日本語と日本文化についてプレゼンテーションをすることが私に課せられました。そのとき発表した内容を簡単にご紹介してみますと：

スペイン語は動詞の活用が難しいですが、日本人にとって発音は英語などよりも易しいです。「アエイオウ」の母音が同じだからです。その一方で、日本語はマスターするのに大変に難しい言語だと思います。理由の一つは文字。ご存知のように日本語の文字には3種類ありますね。ひらがな、カタカナ、漢字です。

ひらがな、カタカナともに50字弱ですが、漢字となると、ふつうに社会生活をするために知っておく文字（義務教育で学ぶ文字ですね）は約2000字になります。外国人がこれらの文字を記憶するには、大変な努力と時間が必要なのです。（「日本人だっておんなじだ！！」と言う方もいるかもしれませんね）

——それに、日本語では自分自身を表現するのにも、10近くの言い方があります。（黒板に書く → 参加者に他の例を聞く）

私（わたくし）、私（わたし）、僕、俺、我、内（うち）、手前、小生、等々。

「わたくし」はより丁寧で上質の表現です。「わたし」は比較的丁寧な表現で、最も一般的に使われていますね。

「僕」「俺」「我」とも男性が使用。このうち「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧さを欠き、「我」はやや古い表現です。

「内」は両性によって使われます。「手前」はへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われますね。日本の社会で大切なのは「謙譲」の心です。これをわきまえないと、まわりから「あいつは傲慢だ。頭が高い」と言われかねないのです。

スペイン語では、自分を表現する言葉は「Yo」の一つだけです。英語でも同じ「I」だけです。もちろん、動詞や助動詞の使い方によって、丁寧の度合いを変えていくことができます。でも、日本語の尊敬語、丁寧語、謙譲語ほどの複雑さではないと思います。こうした日本語の複雑さと難しさについての発表でした。

文学紀行のエピソードから

ここでスペインからヨーロッパ全体に少し目を広げてみましょう。留学を終わると私は「ドン・キホーテ」の「見果てぬ夢」を追う生き方に影響されて世界文学紀行を始めました。

第一作目がセルバンテスの『ドン・キホーテ』。以後、『風と共に去りぬ』（アメリカ）『赤毛のアン』（カナダ）『ロミオとジュリエット』『ベニス商人』（イタリア）『ハムレット』（デンマーク）『若きヴェルテルの悩み』『車輪の下』（ドイツ）、アンデルセン童話、グリム童話（それぞれデンマークとドイツ）、『戦争と平和』『罪と罰』（ロシア）、『レ・ミゼラブル』『三銃士』（フランス）と現在までに15作品にいたっています。

現在、地元の昭島の図書館で、ほぼこの順序でこれらの作品の舞台の写真をパワーポイントで紹介する講座を開いています。先月は「赤毛のアン」、今月17日には「ロミオとジュリエット&ハムレット」が予定されています。

ここですべてをご紹介する時間もないので、出版150周年で訪れたヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』に関する楽しくも哀しいエピソードをお話をします。

「ああ、ハグできなかつたマドモアゼル！」

パリに到着した最初の日の午後5時ころ、少し時間があつたのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急な思い付きだったので予約席券はありません。入り口で自由席券（100ユーロ、約13,000円）を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。隣の席には若くて美しいフランス人女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

“May I take this seat?”（お隣のこの座ってもよろしいですか？）

彼女も私の英語がわかつたらしく“Sure, of course”（ええ、どうぞ）とニコリとうなずきました。フランスでは意外に英語のできる人が少ないです。英語ができて自国語＜フランス語＞への誇りから話そうとしない人もいます。

親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとする二人のフランス人作家（ビクトル・ユゴーとアレクサンドル・デュマ）の作品の舞台や場所について相談しようと思ひ話しかけました。「ジャンバルジャンがコゼットの恋人であり、内戦で傷ついたマリウスを背負って逃げた下水道はどこだったのか」聞きたかつた。

と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたの訪れようとする作品については私

もある程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれません。よかったら自宅にいらっしゃいませんか。家はここからそんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな！”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近く、瀟洒なマンションの3階でした。「よろしかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれ、言ったのです。

「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言うと彼女はバスルームに入っていました。応接間にひとり残った私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き！！

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってよいかわからず、ソファに座ったまま動きがとれずにいました。

と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのでした。パリと東京には8時間の時差があります。夕方の5時は日本の真夜中の1時になっていたのです。

寝ている間に仕事が進む「魔法のマクラ」

時差の話をつくつかしてまいりました。ここで私のパソコン生活最前線のエピソードをご紹介します。

ちょうど15年前にホームページを立ち上げ英語とスペイン語のページも設けました。でも、正しい翻訳のためはネイティブチェックが必要です。私も日本に住んでいる外国人の友人もいますが皆忙しい。それにチェック料金も取られるかもしれません。そこで特派員時代に知り合った友人の、英語はアメリカに住むKさん、スペイン語はパナマに住むMさんに頼むことにしました。

こうして、翻訳した原稿を夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは昼間。早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。つまり、こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。「あんたはいいね。魔法の枕を持っている」なんて友人から揶揄されたこともあります。

更に、世界に事業所を持つグローバルな企業ではこんな芸当もやってのけます。

そこでは、パソコンによる一つの仕事を、インターネットを使い、例えばアメリカのニューヨークから仕事時間が終わるとやりかけた資料をインドへ送る、インドでは続きの作業をし夕方になると今度はイギリスへ送る、イギリスではまたその続きの作業をして仕事の時間が終わるとアメリカへ投げ返す・・・

こうして地球の昼時間を追っかけてその仕事が継続されていく——つまりそれぞれの国の労働者は仕事が終わって眠っていても、リレーされたその作業は24時間どこかの国で続いているのです。1日8時間労働として1日に3倍の作業が進んでいるわけです。

丸い地球の時差を活用！ 時代の最先端のご紹介です。

熟年よ大志を抱け！

世界の文化比較については他にも色々ありますが、時間も迫ってきました。今日ここに参加くださっている皆様は私と同じくらいの年代の方も多いようですので、最後に私の定年後の生き方について、ご参考になればと少しだけお話させていただきます。

まず、「定年後はHaving でなくBeing が大事」だと言われています。財産や貯金を持っていること<Having>も大事ですが、今、何をやっているか<Being>が問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題だということです。

夢が、志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創ると言われています。

世界で最長寿国の日本。人生80年から100年の時代です。平均でも定年後まだ20年の人生が前途に横たわっています。フランスでは「年金生活」という言葉は、晩年と言うよりも第二の人生、といった前向きな意味合いが強いですね。アメリカ人は、第一線を退くと、いよいよこれからの人生を楽しもうとする。だから、服装や化粧も派手になる。

こうした面からいうと、定年は今やゴールではなく、豊かな可能性をはらんだ次の人生のスタートともいえるでしょう。会社に縛られることなく自分の意思で自由に動ける第二の人生が開けているのです。

札幌農学校校長のクラーク博士は言いました。

Boys, be ambitious! 少年よ大志を抱け！

私はこれをもじって、

Seniors, be ambitious! 熟年よ大志を抱け！

と訴えているところです。

「生涯現役かなざわ会」の皆さまにピッタリだと思います。大きな夢を持ちましょう！

「ハゲアタマ」で輝こう

そして最後に、人生を愉しく充実させ、輝かせていくカギは最初にお話しした「ハゲアタマ」にあるとおもっています。イヤ、私のこの頭のようにする必要はありません。生き方です。

<板書>

はつらつと、げんきに、あかるく、たのしく、まあるく（あるいは「前向きにでもOK）。特にこの最後の「マールク」が私は大事だと思っています。人とぶつかり、人の悪口を言ったりギスギスしていてもしょうがない。人生、すでに角が取れて、まあるくなってきた年代のはずですから、自分だけのためにキュウキュウしているのではなく、人を助け、人をたたえ、人を褒めていくことです。そうすれば、自分が助けられ、たたえられ、ほめ

られるようになっていきます。

「人のために灯をともしれば自分の前も明るくなる」と仏典で言われる通りでしょう。そして自分自身が光り輝いていれば、そこには自ずと“自分も輝きたい”という人も寄ってきます。

つまらない顔をしていると、つまらない人生になってしまう。生命に弾むような勢いがあれば、必ず人生も躍動してくるでしょう。残された人生の時間をどんな色に染め上げていくことができるかは、まさに 各人の腕の見せ所となってくるのだと思います。

世界の文化比較から時差についてのエピソード、シニアの生き方、禿げ頭論と、話しはあっちこちに飛んでしまいましたが、皆様が何かをお感じになり、今後の人生のヒントとなり、ご参考になればこんな嬉しいことはございません。

以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。